

新川和江賞

おばあちゃん家

結城市立結城南中学校 二年 湯本 有紗

私のおばあちゃん家はおっかない

歩くと床がみしみし鳴るし、

風が吹いたら窓や玄関がガタガタ鳴るし、

二階は真っ暗でたくさん人形が

置いてあって何だか気味が悪い。

だから私のおばあちゃん家はおっかない。

だけれど、おばあちゃんはそれを家の歴史だと言う。

そして思い出、証とも言う。

おじいちゃん、おばあちゃん、家族でそこで過ごした思い

出、そこに住んでいた証。

そしてまた、この家が生きているからだとも言う。

床や玄関、窓の音は家の呼吸である。

それでも、やっぱりおっかないんだよね

短評 新川和江賞「おばあちゃん家」

今の明るい家と違って、むかし作られた家は、薄暗くて、恐ろしい感じがしますね。床もみしみしして、階段を登って行くときなど、思わずドキドキします。湯本さんのおばあちゃんの家では、二階の部屋には古いお人形さんが置かれているんですね。光線の加減で顔の表情が変わったりして、そっとすることもあるでしょう。でも、とても心を引きつけられますね。その家は、湯本さんが生まれるずっと前から、人びとを守ってきました。おばあちゃんと言っているように、たくさん人の喜びや悲しみや大変な出来事を乗りこえて生きてきたひとびとの証、歴史を抱いてそこに立ち続けてきたのです。湯本さんがたくさん思い出を持って生きていくように、その家も生きていくのです。湯本さんがじっと耳を澄ますと、自分の血につながる人びとの息づかいが聞こえてくるでしょう。その息づかいが詩のリズムになって私たちにも聞こえてくるようです。この詩のすばらしさは、古い家のこわい印象だけで終わるのではなく、それを、生き物のように記憶を持っているという考えにまで高めていくところにあります。

優秀賞

なつのおねいじやらし

結城市立結城小学校 一年 根本 花穂

ゆきかとおもった

なつのおさはやく

みちばたにたくさんのおねいじやらし

ちかくでみたら

ちいさなみずのつぶ

よるのあいだに こまかいあめがふったんだ

そつとさわるこ

ちいさなつぶがあつまって

ポタツとおちた

くきをゆらしてみたら

パラパラととびはねた

みずは

あつというまにみどりのおねいじやらし

「おねいねいねい。」とよこって プチンとよこって

おねいみせてみた

つめたくておねいおはてをひっこめた

おねいのかわりに

わたしがふさふさにさわってみた

もうつめたくなかった

おねいじやらしはうれしそうに

くるんとまわった

短評 優秀賞「なつのおねいじやらし」

おねいじやらしのほかに、あまつぶがういてひかっているのを見て、ゆきだとおどろいたんですね。なつなのにおねいじやらしとあつて、ゆらしてみたら、しずくがおちて、へんしんしたようにみどりのほが、めのおまえにあらわれた。そのおねいじやらしのほかにさわったら、うれしそうにへんかるとまわった。まるでおねいじやらしがおねいじやらしにさわったようにおねいじやらしのものがまほうみたいに入んしんするなって、たのしそうですね。おねいじやらしは、くさくさでもうらぶらぶでも、はじめてみるようにあらうさいめで見ているので、おねいじやらしのうらぶらぶ、たのしいすがたをあらわして、へんかっているんですね。

優秀賞

ひまわり

結城市立江川南小学校 一年 鶴見 星空

たいようさんさん たねからぽっぽ

あーじょうもらーい そらたかく

しちからのびて ほしめがけ

きこもまけない ふうふうき

くわいえ きらろのはなをかす

あーじょう まげま

みじのわわわわ きらきらかがやき

かぜがはじら いえまげま

いじえい はっぱいはなをうらす

あーがーのきまをいじえい

どっかんと おおまへをかすかお

短評 優秀賞「ひまわり」

ひまわりのたねからポッポとめがでて、たいようのあーじょうをい
っぽいあーびて、ほしめがけてへんをのび、はっぱをわわわそまが
せ、きらきらかがやきまがら、かんとやのきまをいじえい」でいかに
とおおへんかかすかかすかかすかかすかかすかかすかかすかかすか
わりのはなが、そらにいっぽいただいほくほくすすすすすすすすすだ
に、おもわずフラポーとさけびました。ちからつよいのちのだからほ
くほく。星望さんのげんきなえがおが、ひまわりのはなのなかにうっか
かすかかすかかすかかすかかすかかすかかすかかすかかすかかすか

優秀賞

キラキラなせかい

結城市立山川小学校 二年 猪ノ原 蘭

わたしのあたまの中でキラキラするせかい
わたしが考えると かめんライダーみたく
いろんな人にへんしんできるよ

歌手になって歌をうたったりもできるよ
空をとぶことだってできるよ

たいようのホットケーキ にじのわたアメ
あまいラムネあじの雨だって

キラキラなせかいにいるとたべれるよ

小さなアリのへんしんして土の中をぼうけんして
とおい国に自ゆうに行けるよ

一人でこわくてねれない日も

わたしのキラキラなせかいに行けば

おばけもゾンビもみんな友だちになれるよ
こわくなくなつて一人でちゃんとねれるよ

大すきな家ぞくとだって

大すきな友だちとだって ずっといっしょ
わたしのせかいはきつとさいきょうで

さいごうのキラキラだよ

短評 優秀賞「キラキラなせかい」

あたまの中のキラキラなせかいは、猪ノ原さんだけのじゆうなせかいです。なんにでものぞむものになることができませぬ。こわいものはたのしいものになり、かなしいことはうれしいことになり、けんかしたともだちだって、せんそうしているくにとだって、すくになかよしになれるし、「こんなじゆうなせかいをもっているなんてほんとうにすばらしい。まねに」ないきょう さいごうのキラキラ。「。しじんもしょうせつかも、かがくしゃも、ほかのみんなも」あたまの中のキラキラなせかい」をたいせつにして、ほんとうのせかいにしようとしていますよ。猪ノ原さんも、おとなになつても、そのようなせかいをわすれないでね。

優秀賞

海の波

結城市立上山川小学校 三年 森 由樹奈

じゃっぱーん ちゃぽちゃぽん
キラキラリ 波がうたってる
じゃっぱーん ぽちゃんちゃぽ
キラキラリ スーイスイスイ
ゆらゆらり ダンスもしてる
ゆーらゆーら ちゃぽんちゃぽ
波でゆーらゆーら 魚がゆらり
ちゃぽりん ざーざーちゃぽぽ
じゃっぱーん 波のがっそう
やーやーり ゆーらゆーらりん
雨の時 ざっぱーんポッ
はらほらり 波があらいな
ドッカーン じゃばじゃばん
ドンドーン ドッカーンじゃば
ざーざーん ざっぱーんドン
ドッカーン じゃばじゃばぶっ
はらほらり

短評 優秀賞「海の波」

波はくりかえし岸によせていますが、その音はひとつとしておなじではないですね。森さんは、そこに気づいたのですね。なにこともちゅういぶかく見つめ、聞いているすがたに感心しました。声をだして読んでいるうちに、波の音にあわせて、からだがゆれ、まるで私のいのちが音にあわせて大きくなったり、しずかになったり、はげしくなったりしているような気持ちになりました。言葉の波の音が、読む人のいのちのリズムとひとつになっているのですね。波も人も、このようにへんかしながら、いつまでもつついていくのだなと、たのしい気持ちになりました。

優秀賞

わたしの手

結城市立江川北小学校 四年 増山 唯花

お兄ちゃんの手
ほくろがあつて少しプニプニ

妹の手

手をにぎると、クリームパンみたい

お父さんの手

ささくれがあつて、ゴツゴツ

トラックのハンドルをにぎっているから、右手が真っ黒

お母さんの手

少しあれて、でもつめはピカピカ

いろんな料理が作れる、わたしの大きな手

おじいちゃんとおばあちゃんの手

ずっと野さいを作っているから

つめの間が土で真っ黒

わたしの手

お兄ちゃんと同じ所にほくろがあつて、

ささくれもある

くらべてみるじ、

おじいちゃんの手が

お父さんより大きくて一番大きい

一番小さいのはやっぱり妹

でも同じ手は一つもない

わたしの手はわたしだけ

この手で何が出来たらろう

まずはじめに、

わたしのすきな事をやってみようかな。

短評 優秀賞「わたしの手」

目のつけどころのすばらしい詩です。家族には、一人ひとりそれぞれの生活があつて、手がそれをものがたっていることに気づいたのですね。お父さんの手は、家族をやしなうためにがんばるがんじょうな手。お母さんの手は、お料理や洗濯などですこしあれているが、ちょっとおしゃれ。おじいちゃんとおばあちゃんの手は、畑仕事の手。同じ手はひとつもなく、それぞれの人生をものがたっている手なのですね。お兄ちゃんや妹の手は、プニプニしてたりクリームパンみたい、唯花さんの手も、まだやわらかでしょう。これからその手で人生を切りひらいていくのですね。どんな人生をものがたる手になるか、楽しみにしていますよ。

優秀賞

わたしのだんご

結城市立結城西小学校 四年 平田 粹

ハムスターのだんご
はいいろでまるまるとまるでごまだんご
ごまだれがたれていてるみたいなんだんご
すなあび大すき、きれいすきなだんご
ひまわりの種が大すき、
もっとすきなのはあわのほ
たくさんのつぶがあるのに
ーしゅんで食べるだんご
夜中になると回し車を回し出すだんご
ぼうけんもすき
夜中に大だっ走
かごをぬけ出し大ぼうけん
まっくらなりピングを走り出すだんご
いつもひくひく動いて、
止まってくれないだんご
かじり木はかじらず登って遊ぶだんご
暑い時は石の上でスライムみたいに
のびてるだんご
ずっといっしょにいようねだんご
たくさん遊ぼうね

短評 優秀賞「わたしのだんご」

「だんご」という題を見たとき、みたらしかな、おいしそうだなと思いました。ところが読んでいくうちにびっくり。飼っている「ハムスター」のことなのですね。たしかにハムスターを見ると、だんごに見えるときがありますね。まるまって眠っているときなんか、本当に「だんご」ですね。それが、ひまわりの種を食べたり、「回し車」を回したり、リピングを走り回ったり、スライムみたいのにびていたりする。ゆかいですね。ほんとうはハムスターが「だんご」ににているのですが、「だんご」「だんご」とくりかえしているうちに、まるで「ごまだれのたれている「だんご」が、家の中で大あばれしているように思えてきます。大きくなってんですね。そがこの詩のとてもおもしろいところ。あたらしさです。読みながら、思わずニコニコ顔。平田さんは、本当にユーモアのセンスがあるなあと思いました。

優秀賞

引っこじ

結城市立城南小学校 五年 板橋 由奈

引っこじすることになりました
にもつを片づけながら
ふわっと、いろいろな思いがあらわれる
毎日ここから
「いってきます」と
元気に学校へ通った
押し入れの中は
私と弟のひみつきち
たくさんの手作りおもちゃがいっぱい
片づけながら思わず
笑みがこぼれる
家族でご飯を食べたりリビング
部屋のあちこちに
思い出が転がっている
荷物と思い出をダンボールにつめる
片づいた部屋はとても広くなって
急にさみしくなった
私と弟は
ポロポロと涙があられた

この家とさようなら
さようなら
大きな声で
「今日まで、ありがとうございました」
何もなくなった部屋に
私たちの声がひびく

短評 優秀賞「引っこじ」

引っこじの手伝いをしていると、それまでは気にもとめなかった楽しい思い出が、あちこちから転がりであるように心に浮かんでくるのですね。それらを荷物と一緒にダンボールにつめていると、思い出に笑みを浮かべながらも、きゅんにさみしい気持がわいてくる。そんな引っこじの気持がとてもよくあらわれている詩です。片づいた部屋は急に広々として、いっそ悲しくなりますね。大きな声で、ありがとうと言つと、こだまが、これからも新しい家で思い出をたくさん作つてねと返事をしているおうちです。たくさんの思い出は、引っこじしたあとも、心の中に一生住みつけて、由奈さんのこころを豊かにしてくれそうです。

優秀賞

私の朝ごはん

結城市立城西小学校 五年 斉藤 百々花

炊飯器を開けると
純白でふっくらしていて
つやつやのお米が顔を出した
まっくらませ、
茶わんによそる
「いただきます。」
一口はそのままでお米を味わう
お米の甘さが口に広がる
二口目はのりで包んで
のりのしょっぱさと
ごはんの甘さが合う、
とても美味しい
三口目は半熟の目玉焼きをのせ、
少ししょうゆをかける
半熟たまごがトロっと流れ出し、
白いお米が黄色く染まる
口に入れると、
たまごの甘さとしょうゆの香ばしさを
ごはんの食感が口の中を満たし、
美味しい
いつものまじか、
こんもりごはんのあった茶わんの中は、

空になっていた

「ご馳走様でした。」

明日は何を乗せようか

短評 優秀賞「私の朝ごはん」

おっとあまりにおいしそうなので、よだねが出てきそうになりました。

ふっくらしていて、つやつやのご飯をまっくらませよう。そのやさしい手ごたえ感。ぱりとしたのりの舌ざわりとしょっぱさと香り。ごはんの甘さ。半熟のたまごがトロッと流れだす、その姿。目に見えると同様に舌にまで甘さ、なめらかなさを感じさせてくれますね。この詩のすばらしさは、わたしたちのさまざまな感覚が受けとる食事の印象をことばでつたえながら、実際にそこにいるような豊かさを感じさせてくれるところですね。読んでいくうちに満ちたりの気持ちになりますね。さわやかな朝の食卓ですね。それに、家族のあたたかな団らんまでも目に浮かびますよ。

優秀賞

水の声

結城市立絹川小学校 六年 増田 奈津樹

手をあらうとき

ジャブジャブ

「ほどよいつめたさにするよ」

水はいつでもしゃべってる

やかんに入れて火をつければ

お湯にもなる

ジヨボボジヨボボ

あったかい湯たんぼができて

いっしょにふとんでねる

「なるべく温度を保つよ」

水はいつでもしゃべってる

チヨロチヨロ

粉の入ったカップに水が入れば

ココアもできる

それを一口飲んで

がんばろうと思える

「どうだい？元気出た？」

もう一口飲むと

元気が出る

「がんばってね」

水はいつでもしゃべってる

はげましてもくねる

人と同じように

短評 優秀賞「水の声」

大昔のひとびとは、樹も草も水も山にも川にも、自然のなかのすべてのものにいのちがあって、私たちとどこを通じ合い、話をすることができると考えていました。そのような感情は、私たちのころの奥にもあって、とくに子供のころはつよく感じています。奈津樹さんも、水道の流れる水の音を聞きながら、話しかけてくれるように感じていますね。湯たんぼに入れるためにお湯がわくときも、温度を考えなくて、ココアをつくってくれるときも、はげましてくれて、いつも話しかけ、しゃべってくれる。友達であり、お母さんのようでもあり、お父さんのようでもあり、それいじょうに奈津樹さんのいのちを支えてくれる親しみのある大きな力ですね。水の音を聞きながら、そのような力を感じるとき、自然を大切にしなければいけないという気持が生まれますね。

優秀賞

空

結城市立結城中学校 三年 加藤 美羽

空を見た
寝そべった僕に見えたのは
何も無い青だけだった
つまらないそれは
一度もかすれることなく
僕には見えない所まで
果てしなく続いた
僕はとても怖かった
時計の針が
ずっと同じ数字をさしている気がした
やがてインクが切れ始め
何もなかった青に
白が点々とする
僕の時計が力チ力チと
再び動き出した気がした
それなのに僕の心は
何も無い青のままだ

短評 優秀賞「空」

寝そべって空を見上げると、まわりの景色は消えて、ただ一面空が広がっていますね。雲が流れていけば、そこに動きがあって、時間が流れているのが分かりますが、どこまでも青一色の空では、時計も止まっているようです。眺めている「僕」の時間も止まってしまふ。やがて、白い雲が点々と現れると、再び時計が動きはじめ、生命の時間が流れ出す。おそらく美羽さんは、そのような不思議な経験をしたのでしょう。時間もなく、果てもなく、底知れない恐ろしい世界。すべての生命が失われ、ものだけの世界を一瞬間見たのでしょふ。そこから生命は何かを深く考えはじめる詩です。女性の美羽さんが「僕」と言っているのは、自分の性からいったん離れて、別の人格になって、客観的に自分や世界を見ようとしているのでしょふ。

優秀賞

バイオリンの音で

結城市立結城東中学校 三年 レティタム・レオク

未来はだれにも分らない

未来は人によるが

私はバイオリンで

自分の未来に響く

優しい音

バイオリンをひくたびに

明るい未来を想像する

初めてひく音

かすかに見えてくる未来

うまくいかないときは

落ちこむ

うまくいったときは

うれしくなってくる

バイオリンは私といつも

いっしょにいた

だから

私は

バイオリンの音で未来に行く

短評 優秀賞「バイオリンの音で」

レティタムさんは、バイオリンを練習しているんですね。毎日、練習しながら、いつもその美しい音に包まれている姿が目に見えます。バイオリンの音は、レティタムさんのこころとひとつに溶け合っているのでしょうか。楽譜に沿って演奏しながらも生まれる音楽はレティタムさん独自のものです。そこに人生を感じているんですね。楽器から流れた音楽は、部屋を出て、はるか遠くまでかすかに、かすかに流れていく。そこに未来を見ているんですね。バイオリンの音とひとつになったレティタムさんのこころもまだ見ぬ未来へ向かっていく。どんな未来か分からないが、音楽と一緒になら、必ず素晴らしい未来になるでしょう。

優秀賞

循環する生命

結城第二高等学校 二年 上野 愛莉

どつくんどつくん心臓の鼓動が鳴り止み
身体がほんのり冷たくなった
今にも目を開きおはようと言いそうな顔
人は生まれやがて土に帰る
命はいずれ魂になる
生まれる前と魂になった後
違いはあるのだろうか
人は生まれる前どこでなにをしてたのだろうか
人は魂になった後どこでなにをするのだろうか
産ぶ声を上げる小さな赤子
くしゃっと笑った可愛らしいその顔
つられて周りも笑顔になる
死と生
命はどこかでつながっている
長い長い歴史の間
前世、来世はきつとありうる
そう
命は循環しているのだから

短評 「優秀賞」循環する生命

私たちは、時間をどのように考えているのでしょうか。到着する所もなく永遠に流れていく。或いはその果てに大いなる救いが待っている。或いは、ぐるぐると循環している。人間には、避けがたく死が待っている。その恐怖から、時間とはどんなものかいろいろ考えるのである。古代の人は、太陽の運行を見て、朝、生まれ、夜、西の果てで死に、また、朝に生まれ変わると、循環するように考えました。それを人間のいのちに当てはめて、死ぬと魂になって、死者の世界に行き、大きな勤めを果たして、またいつか生まれ変わると考えました。何に生まれ変わるかという恐怖はあっても、生まれ変わることに救いを感じたのかもしれない。愛莉さんの詩も、そのような人間が昔から考え続けてきた大問題に触れています。生命が循環すると考える時、どんな小さなのちも、壮大なのちの循環の一瞬だと思えて、愛おしく、何よりも大切なものに思えてきますね。

優良賞

しゃぼんだま

結城市立結城小学校 一年 若林 葵陽

しゃかしゃかすところう すっちゃだめ
わたしのいきがまんまるになる
ふわふわ ふかふか にじみだい

やさしくぶうってするよ
おおきいのがひとつ
わたしのかおがうつつている
ちからをこめてぶうってするよ
きらきらたくさん まほうみたい

いろんないろ あお ぴんく きいろ
かぜにゆられておさんぽ
どこどこくの

なかにはいっっちゃおうか
いろんないろがみえるね
そらのうえでおさんぽ ゆらゆら
くもとおいかけっこ まってまって
にじのすべりだいますべっっちゃおう
あめさん ぶらないでね

おつきさまにもみせてあげたいな
がんばれ がんばれ
そらのむこうまでとんでゆけ

優良賞

ゆいちゃん

結城市立絹川小学校 一年 杉山 莉彩

ゆいちゃん
わたしのおねえちゃん

ゆいちゃんに
かみのけを
しばってもらったよ
うれしかったよ

かおのよこ
あかとしろのこむで
しばって くれたよ
しばったら
かみのけがびよんと
なったよ

ゆいちゃん
やさしい わたしのおねえちゃん

優良賞

あめのなむらぼ

結城市立江川南小学校 一年 鈴木 聖琉

あめのひのおさんぽがだいすき
かさがだいすき
あめのおともだいすき
あめがふるよわくわする
おきにいりのかさでママとおさんぽするの
あめのひのおさんぽは
いつもアメをなめながらおさんぽするの
みずたまりがだいすき
みずたまりにはいると
えがおになるの
こころがたのしくなるの
チャプチャプチャプ
みずたまりにはもんがひろがるひろがる
まるでおはなみたい
おおきなおはながさいたよ
きれいだねママ
チャプチャプチャプ

優良賞

おぶろ

結城市立山川小学校 一年 阿久井 夏帆

あ、みてー！
シャンプーしたら、ちいさいしゃぼんだまがとんできた
よ。
ぶー、ぶー、とととぶー！
あれ？ぶーにうった。
ねえ、みてみてー！
あわで、しろひげじいさんだよ。
くびにたくさんあわつけたら、あわのマフラーになった
よ。くすぶったいー！
ほらみて！かがみがくもったから、おひめさまかいたよ。
かわいいでしょ？
またあしたもいっしょに、おぶろはいるさうね。

ピアノ

結城市立山川小学校 一年 坂本 有絆

ドのおとをひくと

ドーナツをたべたくなるよ

シのおとをひくと

やわしいこえのままみたい

ミのおとをひくと

すまじぶをしたくなるよ

ファのおとをひくと

けんかをしたあともやもやしたきもちになるよ

ソのおとをひくと

そらをとんでみたくなるよ

ラシシラシシとひくと

みんなのわらっているかおがおもいうかぶら

たかいドのおとをひくと

テストでひゃくとんとれたときみたいにくきもちがいら

だからまいにちピアノをひくと

ゆめのなか

結城市立上山川小学校 一年 飯山 陽愛

まいにちままと「おはよう」

ときどきままと「たのしいゆめだったの？」

ってきくの。

でもね、たのしいゆめかおぼえていないの。

ときどきままと「かなしいゆめだったの？」

ってきくの。

でもね、かなしいゆめかおぼえていないの。

ゆめのなかってすぐくらくらしぎ。

おぼえていれば、おはなしでできるのになあ。

みんなどんなゆめかなあ。

きょうはどんなゆめかなあ。

たのしいゆめかなあ。

こわいゆめかなあ。

おもしろいゆめかなあ。

どきどきわくわくするけど

きょうもままと「おやすみなねえ」

木のきもち

結城市立上山川小学校 一年 吉田 瞬

しっかりとたっている木
きをつけがじょうずだね
がまんじよいね
なつはたぐさはっぱをひけて
ひかげをしゅう
すずしゅうくねるね
あきはあかきいろのはっぱをひけて
きれいでびんきをくねるね
ぶゆははっぱをせんぶおとこつ
むしやごじぶつのおぶとんをしゅうて
あつたかしくくねるね
はるになるとはっぱのほかにはなもつけて
みんなをおうえんしているんだね
まいにちあなたは
どんなきもちですごしているのかな
むかしこのまのすみやすきはじぶですか
あなたのきもちも知りたいな
あつたかしくくねるね

赤ちゃんとお母さん

結城市立結城小学校 二年 外山 泰雅

ぼくのお母さんのおしごと
赤ちゃんが生まれる時のお手つだい
赤ちゃんは生まれてくると元氣になくんだよって聞いた
ぼくも生まれてすぐに元氣にないたそうだ
赤ちゃんはおなかの中で何をしているのかな
ねていますか
あそんでいますか
おなかはすいていないですか
ないていませんか
お水の中でくるしくないですか
ぼくは赤ちゃんの時、お母さんのおなかであつたかくて
気もちがいいなって思っていたよ
まい日お父さん、お母さん、おにいちゃん、おじいちゃん、
おばあちゃんのことを聞いていたよ
みんなに早くあいたいなって思っていたんだ
「生まれてきてくれてありがとう。」
「お母さんはいつも言うけれど、ぼくはお母さんについて
言いたい
「ぼくを生んでくれてありがとう。」

優良賞

きんぎょ

結城市立結城西小学校 二年 戸沢 悠花

まっかなきんぎょよ
目がおっきなきんぎょ
あかちゃんきんぎょよ
ぶちもよのきんぎょよ

きよねん夏まつりでたくさんすくったよ
いろんなしゅるいのきんぎょたち
スイスイ元氣におよいでいる

水の中でキラキラ
光にはんしゃしてとつてもきれいな
ずつとながめていたよ

けど、すぐにしんじゅった
水もとりかえて、えさもあげてたのにな

でもね、一ばんちっちゃかった
あかちゃんきんぎょよ

一ぴきだけども今も元氣におよいでいる

ことしの夏まつり

おともだちたくさんつれてくるね

一ばんちいさかったきんぎょよ
ことしはきつと一ばん大きいね

またみんなで元氣におよいで
キラキラ光るところ見たいな

優良賞

図かん

結城市立城西小学校 二年 山中 千博

図かんで、すごい本だ。

きょうも、図書しつで 図かんをかりた
ぼくのしらないことを、おしえてくれる

ぼくの行けないところへつれていってくれる
うみの生きものや、どうぶつたち、

水ぞくかんや、どうぶつえんに、いるみたい
ぼくは、すえっ子だから、なかなか行けない

でも、そこにいる生きものたちより
たくさん生きものに出あうことが
できるんだ

それから、日本のことや、せかいのこと、
人の体のつくりの図かん

ぼくの体の中って、こんなふうになって
いたなんて

きょうりゅうの図かんだって
タイムマシーンにのって、大むかしに行って

こんなたくさんさんのきょうりゅうが
いたなんて

ぼくには、しらないことばかり
すごいな！

だからとってもおもしろい
しらないことをしるって、おもしろい

ワクワクするよ。
まだまだ図書しつには、たくさん

図かんがある
どんなにあつくて、おもしろい図かんでも

ぼくはかりて帰るよ。
そこには、ぼくのしらないせかいがあるから

優等賞

おぼあちゃん

結城市立城南小学校 三年 上條 隆也

とおくにすむおぼあちゃん
 なかなか会えないおぼあちゃん
 夏休みにやっと会いにきた
 「こんにちは。とおかったでしょう。」
 「ここにきていたおぼあちゃん
 こんにちは。」
 ぼくは、なんだかはずかしくて話せない
 たくさん話すことがあるのに話せない
 「とくいなじゅぎょうはなに。」
 「図工だよ。」
 弟とぶざけたりしているぼく
 おぼあちゃんはぼくたちのことを見てずっと
 ここにこしている
 なんだかうれしそう
 おぼあちゃんとあんまり話していないのに
 もう帰る時間だ
 「ありがとう。元気でね。」
 ぼくたちを見ているおぼあちゃん 少しさみしそうだ
 もっとたくさん話せばよかったな
 ぼくは弟とたくさん手をふった
 「またくるからね。元気でいてね。」
 心の中で何度も言った

優等賞

かげは友だち

結城市立江川北小学校 三年 増山 萌花

かげは友だち
 かげはいつもわたしについてくる
 わたしにとって友だちみたいなさぞい
 家についてもついてくる
 しゃべらないけどいつも一しょ
 一しょにいると楽しい
 いつもわたしのまねをしてくる
 でも光に当たるとすぐきえちゃう
 学校に帰る時もいつも一しょ
 だからぜんぜんこわくない
 光に当たってきえちゃう時は
 「またあしたね」と言ってすぐきえちゃう
 そして朝になると
 「また会えたね」と言っついてくる
 よるも一しょ朝も一しょ
 わたしはかげの言葉がわかる
 だってもう一人の自分だから
 かげにかんしゃの言葉をつたえたい
 「いつもありがとうかげ」
 「これからも一しょにいてね」
 と伝えたい
 かげはやさしい
 だれかとけんかしてないてる時も
 いつもなぐさめてくれる
 そんなやさしいかげ
 わたしだけだと思っ
 かげ大すきだよ
 これからも一しょだよ

優良賞

あむがぶ

結城市立江川南小学校 三年 柳田 新

玉ねぎのような形のお部屋から引っこしてきた六人兄弟のぼへ

茶色のふとんでねています

夏のはじめに、せがのびました

水や太よの光をいっぱいあびたからでしょう

くるくる山道をカーブするように、空に向かっのびました

夏休みは、お手ついでカーテン係をしました

かさを買いました

広げると大きな水色のかさでした

ピンクやむらさきのお友だちもいました

夏の終わりに、また玉ねぎの形の部屋を見つけました

かべ紙を黄緑から茶色にぬりかえました

さようなら、また来年

優良賞

ありの天気よほう

結城市立城西小学校 三年 工藤 愛梨

はたけのわきのへいにそって

ありが一れつにならんであるいている

どこへ行くのかな

何をほこんでいるのかな

後をついて行ってみたら

へいのまわりをぐるりと回って

はんたいがわの高い所に

新しい家をつくっていた

どうしてひっこしているのかな

今までの家、あきちゃったのかな

そんなことを考えながらありたちをながめていたら

「大雨がふるぞ」

じいちゃんが言った

つぎの日、ほんとうに雨がふった

ありたちは、雨がふるのを知っていて

高い所にひなんしていたんだね

ひっこし間に合ったかな

新しい家は、水びたしにならなかつたかな

ありたちは、雨がふるのが

どうしてわかつたんだらう

ありの天気よほう

あたったね

優良賞

空の表じょう

結城市立城南小学校 四年 大竹 芳佳

わたしは空がすき
いろんな表じょうを見せてくれるから
朝、太陽に向かって鳥達がはばたいている
キラキラした朝日が気持ちいいな
真っ青な空に長くのびる飛行機雲
どこまで続いていくのだろう
わたあめみだいな入道雲
雲の中はどうなっているのかな
空がだんだん暗くなって
かみなり雲がやって来た
ピカピカゴロゴロザーザー
早くやんで晴れますように
雲の間から太陽の光がさしこんで
いつの間にか七色のにじがかかっている
雨つぶに当たる光とにじが
キラキラかがやいてきれいだな
夜の空には星がかがやいている
流れ星見られるといいな
一日のうちいろいろ変わる空の表じょう
明日はどんな空が見られるのかな

優良賞

魚

結城市立江川北小学校 四年 池田 健人

魚は ふしぎ
体の色が ふしぎ
せびれが ふしぎ
うろこが ふしぎ
歯がないのが、ふしぎ
目がないのが、ふしぎ
小さいひれなのに早いのがふしぎ
一カ月食べなくても生きているのがふしぎ
魚は すこい
色が きれいだ
せびれがすぐとくて すこい
うろこが役に立って すこい
歯がないのに食べて すこい
目がないのにねむれて すこい
小さいひれで早く泳いで すこい
一カ月食べなくても生きられるのがすこい
魚ってふしぎがいっぱいすこいがいっぱい

優良賞

風の音

結城市立江川南小学校 四年 中山 大地

風すぎ、だんだんぼくにせまってくる。
あみ戸から入るこちよい風。
スーッとかみの毛にふきかかる。
ぼくはそのふきかかるものに目を閉じてみる。
その時からぼくはゆめの世界へと入り込む。
頭の中にはむげんに広がる草原。
目の前には大好きなスイカ。
半月に切ったスイカを大口で食べる。
草原はザーザーと音を立て、大きい雲が集まってくる。
その音を聞きながらぼくは背すじがびいーっとなる。
その時、ぼくは目が覚めた。
あみ戸から入る強い風がぼくの体を強くたたきつけた。
どろどろ音がくるらしい。

優良賞

花の笑顔

結城市立山川小学校 四年 宮田 莉玖

夏の初めにひまわりと朝顔の種をたくさん植えた。
きれいに咲きますようにと水をまぐ。
さいしょに咲いたのは朝顔。
朝の笑顔がいっぱい咲いた。
ひまわりは、なかなか笑顔を見せてくれなかったけど一本
だけ大きい笑顔が咲いた。
夜、家に帰ると、朝顔がまださいていた。
「お母さん、朝顔は朝しか笑顔みせてくれないんじゃない
の?」
お母さんは、
「じゃあ、夜顔かな?」
朝、風、夜、ぼくの庭は笑顔でいっぱいだ。

優良賞

詩を書く意味

結城市立結城西小学校 四年 皆川 千優

私はなぜ詩を書くのだろう

かんたんだから

・・・いやちがう

私はなぜ詩を書くのだろう

すぐ終わるから

・・・いやそれもちがう

二人の自分がしつもんし合っている

本当になぜ私は詩を書くのだろうか

二人がしゃべる声を私は耳をすませる

私は耳をすませてきいてみる

私はなぜ詩を書くのだろうか

・・・あっ!!

自分の気持ちが書けるからじゃない？

「そうだね!。」

やっとわかった自分が詩を書く理由が

私が書く詩は最優秀賞とかに

えらばれたいわけじゃない

ただただ人に読んでほしいから

優良賞

帰り道

結城市立山川小学校 五年 阿部田 美雨

みんなの帰り道を知りたいな

となりのくみちゃんは帰り道がジャングル

おむかいのけんくんはいいにおいの帰り道

ぼくのパパは、よの道がまじった帰り道

ぼくのパパは、お話が多い帰り道

ぼくのおばあちゃんは、つかれる帰り道

ぼくのおじいちゃんは、車いすの帰り道

ぼくの帰り道は、あたたかい

幸せになれる帰り道

優良賞

夏の川

結城市立結城小学校 六年 岩田 宇琉亜

川が「ザーザー」とうなっている。
所々に、苔がはえた岩が、
水面から顔を出している。
暑い夏、川は、冷たさとその音で、
体とともに心もいやしてくれる。
魚が泳ぎ、ウロコを輝かせて、
川をのぼっていく。
流れが強い中を必死に泳いでいく。
川はすばらしい。
しかし、時に川はきばをむく。
ただ水が流れているだけなのに、
流れがとてつもなく速い。
まるで、悪魔が川の中にひそんでいるかのようだ。
人でも簡単に流されてしまう。だからこわい。
だが美しい
川という自然は、複雑なものなのだ。
だが、
ぼくはそんな川が好きだ。

優良賞

鳥の巣

結城市立結城西小学校 六年 松村 奈々

家のハナミズキの木に
鳥の巣ができた
中を見ると一つ
かわいらしい卵があった
巣をよく見てみると
枝と枝で組み合わさっていて
とてもきれいにつくられていた
鳥はすごいと思った
毎日鳥の巣を観察する
親鳥が卵を温めていた
ピーピーと鳴きながら
卵の様子を見てみると
一つから三つに増えていた
まだ産まれていないから
産まれてくるのが
楽しみだ
早くかわいい鳴き声
聞きたいな

優良賞

ぬいぐるみって…

結城市立城西小学校 六年 中山 実璃

ぬいぐるみってふわふわだなあ
きつとぬいぐるみたちは、私がない間に
お風呂に入って太陽さんのまほうで
ふわふわにしてもらっているのだろうなあ

ぬいぐるみってかわいいなあ
きつとぬいぐるみ同士でどっちがかわいいのか対決を
しているのだろう
勝った方は一日私と遊べる券がもらえるのだろうなあ

ぬいぐるみって実はお話してできるのかなあ
私が知らない間に
きつといろいろお話しているのだろう
だからいつも表情が違うように見えるのかなあ
けんかしたり、笑ったり、
その日あったことが分かるんだ
ぬいぐるみって動くのかなあ
私が知らない間に
きつとおにごっことか、かくれんぼとか、
しているんだろうなあ
だからいつもかくれている子がいるのか!!
楽しそうだなあ

ぬいぐるみっていいなあ
おもしろいし、かわいい
そしてなによりも“温かい”

優良賞

誰かのけはいがする

結城市立結城南中学校 一年 岩田 大夢

ぼくが外を
トコトコトコと
あるいていると
後から誰かのけはいがする
後をむいても
誰もいない
ぼくはこわくなって
手足にとりはだがつ
ぼくはきゆうに涙がでそうになった
ぼくは涙をこらえて走って帰った
けどやっぱりなにかのけはいがする
ぼくは涙をこらえられずに泣いてしまった
そうしたらけはいがなくなっていた
あのけはいは
なんだろうと
今でもなぞだ

優良賞

つとむ虫

結城市立結城中学校 二年 野口 響

道ばたにいてこのつとむ虫

どれだけ生きてきてどれだけ生きれるだろう

つとむ虫は自由で楽しそうに見える

つとむ虫は小さい一歩を積み重ね宙を飛び時もある

つとむ虫は今日飛び今日小さな一歩をふみ出している

小さな命小さな体人間みたいな大きな体長い命だけじゃ

ない

小さな命小さな体は今日も頑張って飛び小さな一歩を積み

重ね生きていく

優良賞

自分で決めるもの

結城市立結城東中学校 三年 岩瀬 日菜子

私の未来ってどんなものなんだろう

ある時私は思った

未来は水のように

絶え間なく変化していくものだろうか

音のように

静かに消えていくものだろうか

蝶のように

美しく生命の息吹を感じられるものだろうか

宇宙のように

未知の可能性にあふれているものだろうか

雪のように

儂いものだろうか

太陽のように

まぶしすぎるくらい明るいものだろうか

月のように

神秘的なものだろうか

雷のように

幸運や困難が突然落ちてくるものだろうか

霧のように

前も後ろも横も分らないものだろうか

でも未来は誰にも分らない

自分がつくっていくものだから

明るい未来も暗い未来も

決めるのは自分だから

私は自分にとって最高の未来を

自分の手で決めたい

未来は自分の中にあるのだから

優良賞

私の頭には木が生えているんだ。

茨城県立結城第二高等学校 二年 大森 優香

私の頭には木が生えている。

でも、いつの間にか木の根を残して消える。

私の頭には木が生えている。

栄養剤を与えているわけでもないし、愛情を注いでいるわけでもないのに、木は音も立てずに育つ。

大きく育ったとしても他の人には見えない。

自分だけに見えるその木は話す事ができる。

私へ向けた皮肉たっぷりなの

悪口しか話さないけど。

私の頭には木が生えている。

自分をコントロールするのが難しくなって

もう一人の自分があざ笑う声が聞こえた

.....気がした。

私の頭には木が生えている。

生えてほしいと神様に願っていないのに、

『私の頭には木が生えているんだ。』

優良賞

閉じ込める

茨城県立結城第二高等学校 二年 手島 絵里

閉じ込めようこの一瞬の出来事を。

閉じ込めよう宝箱に。

自分だけに価値があるのかもしれないけれど。

閉じ込めよう自分が感じた感動を。

そして、共有する。

閉じ込めるからこそ、ずっと残り続けるこの思い、奇跡。

自分が感じた思いを共有したい。

そして、感動してほしい。このとき、あの時間、こんなにもステキなことがあったということ。

写真は感情を、いとおしさを、一枚に閉じ込める。

時には苦しさを悲しさを閉じ込める。写真は記録。失くな

ることもあるかもしれないがそれまで残り続ける。

それでも、だから、私は撮り続ける。

伝えるために、残すために。

ここに一枚の写真がある。

全員がニコニコしている。

キラキラ輝くこの一瞬を閉じ込めた。